
SPECIAL WORKER

雨月 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SPECIAL WORKER

【Nコード】

N3042Y

【作者名】

雨月 藍

【あらすじ】

依頼として成立すれば何でもする。『黒代屋』通称何でも屋を営むのは社長と呼ばれる青年とその手伝いである少女。そんな彼らに巻き込まれたり巻き込んだりする周囲の人たちの物語。さて、今日はどんな依頼人が訪れるのか。

プロローグ

「はあ……一向に仕事が減らないんだが、どういふ事だい、夏樹ちゃん」

溜め息を洩らし、ルービックキューブをカチャカチャと弄っている青年が呟いた。

「社長の仕事量が少ないんですよ」

机の上で事務的仕事をそつなくこなす、見かけ十四五の、夏樹と呼ばれた少女が言った。

黒髪を長く伸ばしており、先で結んだポニーテイルの髪型だ。年頃の女の子相応の格好をしており下はスカートをはいている。

対してソファアで転がる社長と呼ばれた青年 本名、神野 七夜は夏樹と同じ黒髪だが、地味な出で立ちをしている。

特徴を上げる事ができない、どこにでもいそうな普通な感じを持っている。

ただ頭を支えに寄せ、膝を曲げて足をもう片方の支えに乗せているのはあまり普通とはいえないが。

「手厳しいねえ、夏樹ちゃん。ちなみにあと幾つ位残っているかな？」

「えっとですね……二十一個です」

「ふうん……ん、今何個って言ったのかな？」

「二十一です」

「二と十一？」

「二十一」

「仁藤重一」

「ありそつな名前で誤魔化さないで下さい！」

夏樹が声を上げて、先程から使用し続けている万年筆を構える。狙いは当然七夜だ。

「ごめん、ごめん。二十一ね」

七夜が謝ると、数秒睨みつけたままだったが、ようやく万年筆を下ろして仕事へと戻っていった。

だと言つのに先の会話を忘れたように七夜は直ぐに呟く。

「次来た依頼人の人に手伝ってもらう様に頼もつかな」

「依頼人様にそんな事をさせないで下さい！」

「うーん、そうでもしないと仕事が減らないからさ」

「なら、そのルービックキューブを早く完成させてください！」

「ええ！？ これ、結構難しいんだよ！？」

「それよりもこっちの書類を埋めて下さい。私が見ても書けないことばかりなんですから」

しょうがないなあ、と言って七夜は動き、夏樹と場所が変わる。長らく椅子に座っていた所為で疲れていたのか、先の七夜と同じ体勢でルービックキューブを弄り始める。

「……？ 夏樹ちゃん、これ本当にここに来た依頼なんだよね？」

「そうですが、何か問題がありましたか？」

「宝くじなんだけど……」

「……………」

「夏樹ちゃん、気がつかなかった？」

「……………」

「……………夏樹ちゃん、パンツ見えてるよ？」

「え、嘘っ」

直ぐにソファーから起き上がる夏樹。十分遅いのだが。

「何で早く言ってくれないんですかっ！」

「え……気付いててやってるものだ」と

「ふざけないで下さいッ！何でそんなことしなくちゃいけないんですか！」

七夜の言葉に憤慨して真っ赤な顔のまま怒鳴る。

「ごめん、ごめん。残りの割合7:3でやるからな」

「えっ、本当ですか？」

「うん。たまには社長として働かなくちゃね」

それだけで機嫌を直す夏樹。

置いてある宝くじは別においておくとして、残りの書類に取り掛かる。

それと同時に夏樹がキューブを放り出し、立ち上がった。

「さて、ルービックキューブも終わりましたし、コーヒーでも飲みますか」

「……もう終わったの？」

「ええ、簡単でした。……あ、社長もコーヒー飲みます？」

「お願いするよ。僕のは」

「ホットですよ、分かってます」

駆け足で部屋を出て行って、しばらくすると扉を閉める音が聞こえた。

慣れた手つきで七夜が片付けて行くと、一つの文を発見して手が止まった。

長い時間それを見つめていたが、足音を聞き、急いで引き出しを開けてその中へとしまった。

ちょうどその後に、コーヒーを持った夏樹が入ってきた。

両手に一つずつ持って片方からは温かいことを示す煙が上がっている。

「どうぞ、社長」

「うん、ありがとう」

ズズズとしばらくコーヒーを啜っていた七夜。
同じくコーヒーを飲む夏樹だが、

「あ、夏樹ちゃん。はい、ルービックキューブ」

七夜の一言で盛大に吹き出した。

「ま、まだあるんですかあ？」

「うん、あと四つ」

「四つ!？」

そんな感じが、この仕事場のいつもの日常。
依頼を受ければ絶対にこなす『黒代屋』。

見てみよう、それを営む二人……神野七夜と雪宮夏樹が送る……
何でも屋の仕事の数々を。

プロローグ（後書き）

前作を直したところで新作です。
向こうよりこっちの出来の方が良い様な……。

第一話：依頼人

「時々思うんですけど……何で社長は子どもの依頼と個人の依頼しか受けないんですか？」

ソファアの上に雑に重ねてあるルービックキューブを取り、クルクルと回しながら遊んでいる夏樹が言った。

『黒代屋』の社長である七夜は欠伸をしながら夏樹の方を見る。

「それは夏樹ちゃんを知るには早すぎるよ」

「そんなに深い理由があるとは思えないんですけど!？」

「いやいや。理由があるからこそ決まり事もあるんだよ。だから十四歳の子が知るには早いよ」

「私十五ですけど……。というか、社長と六つしか変わりませんし!」

「……僕まだ十九なんだけど」

「その歳でサバ読むのやめて下さい！ みつともないですよ！」

「鯖？ 鯖は好きじゃないな」

「そっちの鯖の話はしてませんよ！」

「じゃあどのさばだい？」

「うっ……えっと……」

「出てこないだろ？ 慣用句なんて言葉の綾で言ってる様なものだよ」

「……なるほど。……って、慣用句って分かってるじゃないですかッー！」

「……まあそれは置いていて」

「置いてとくなー！」

夏樹の突込みを無視して、七夜は机の引き出しを開けて何かを探り始めた。

机の構造上故に夏樹の位置からは何をしているのかがまったく見えない。

「社長、何してるんです?」

「質問に答えようと思ったんだけどね。僕は記憶力が良くないからわ。」

多分日記かなんかに書いてあると思うから探してるんだけど…

…

紙を動かすような音がして何秒か経った頃、七夜が声を上げた。

「あ、あつた」

七夜が持ち上げたのは一冊のノート。タイトルを書くようなでかいスペースに、『落書き日記 2』と書かれている。

…… 2 ?

「社長、そのタイトルのところの数字何ですか?」

「これかい? これは多分歳を書くこととして間違えたんだろうね。」

推測するに20だよ」

……つまり二十歳になっても0すら間違える人だったんだ。
凄い……別の意味で凄い。

「えっと……依頼範囲の事だっけ？」

パラパラと七夜がノートを捲っていく。その速さにすぐ見つかる……というか、あんなの中身が見えるわけない！

「お、ここだ」

「嘘!？」

素っ頓狂な声を上げる夏樹に訝しげな眼を七夜が向ける。

「どうしたんだい？」

「いえ……なんでもないです」

「ならいいけど……」。

えつとね個人の依頼のみにしてあるのは企業に関することができなからだ」

「企業？」

企業は利益を第一とするものばかりで、多数の人間が働くからこそ成り立っている。

そこへ関わってしまったえば、売れる売れないにしても他の企業と差が出てしまう。

依頼だからと言って経済に関わる事は良くない、という七夜の判断で個人の依頼に留められているわけだ。

「…………社長何気に考えてたんですね」

「さっさと酷い事を言っね」

「じゃあ子どもの方はなんですか？」

「……………」

夏樹がそれを尋ねると七夜は黙ってしまった。

そんな時と同時にタツタツタツとリズム感ある足音が響いてきた。そのすぐに扉が開けられる。

「姉ちゃん！ 頼んだやつ出来てる？」

その声を上げた少年を、

「久しぶりっ、ケイタ君」

満面の笑みで夏樹が迎える。

「頼んでた依頼は？ 出来たの？」

ケイタに急かされ、夏樹はソファアームの上においてあるそれを渡す。それ……は先ほどまで彼女が遊んでいた物でもある。

「はい。でも何で皆ルービックキューブを完成させてって頼むのかしら？」

「それは宿題なんだよ」

「宿題？」

「そう。担任の先生がパズル系が好きでさ、頭を良くするにはこれをやれってさ」

……変な人。

学校の宿題でそんな物出すって……普通に考えられない。

「あ、後の三つもちょうだい。皆に渡しとくからさ」

「そう？じゃあよろしくね」

後の三つを手渡すと、無邪気な笑顔を向けてケイタが去って行く。

「子どもって良いですよね」

嬉しそうにそう呟く夏樹の後ろで、

「だから依頼の対象にしてあるんだけどね」

彼女に聞こえない声で七夜が呟いた。

「最近、夏樹ちゃんの料理が手抜きな気がするんだけど……気のせいかな？」

「気のせいですよ」

「うん……カレールーが溶けきってなかった気がする」

「気、気のせいでは？」

「焼き魚の中身に豆腐が入っていたり」

「そ、それも気のせいです」

「ピザにチョコがのっていたり」

「……………」

「バニラのアイスがいつのまにかコーラのシャーベットに変わっていたりね」

「……………ひ、ひどいことをする人も、いるものですね」

「そうだねえ。しかもその子が寝言で……………」

「な、何か言ってたんですか？」

「いや、面白すぎて言えない」

「ちょっと！？何言ってたんですか、私！」

そこでニヤリと七夜が笑った。
……………しまった。

「はい自供しましたと。罰として一週間料理当番ね」

「えーそれはなしですよー」

「まあ頑張つて。それに……」

七夜はスタスタと歩き扉を開けた。驚きなのはそこに人が立っていたことだ。

見かけ三十前後の男性が、おろおろとした様子で七夜を見ている。

「長い夜が始まりそうだしね」

「……って事は」

「そう。お掛け下さい、依頼人様」

そう言って、『黒代屋』の社長は普段見せているものとは違う笑みを浮かべた。

第一話：依頼人（後書き）

なんか書くの久々……。

次からは第一章です。

もうちょっと上手く書きたい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3042y/>

SPECIAL WORKER

2011年11月22日02時00分発行